

## ウィーン売買条約 (CISG) と法学教育

曾野 裕夫  
ルーク・ノッテジ

毎年、復活祭を目前に控えた時期に、ウィーンには世界各国から分厚い法律書を抱えた学生たちが集まる。

「ウィレム・C・ウィス模擬国際商事仲裁大会」に参加するためである。別の機会に紹介したように(曾野「ウィーン売買条約をめぐる法共同体の生成と法学教育」NBL六二八号(一九九八)、Notage "Educating Transnational Commercial Lawyers for the 21st Century" (ID) 法政研究六六巻一号(三三三)一九九九)、これは「国連国際物品売買契約条約」(CISG、ウィーン売買条約)が適用になる仮定の事案をめぐって学生が準備書面の作成と口頭弁論に挑む大会である。日本は未批准のCISGは、国際取引における法律家の「共通言語」(*lingua franca*)としてその重要性を日ごとに増しており、それを反映して大会参加校の数も年々増えている。今年の第七回大会(四月一四日〜二〇日)には、二八カ国から合計七九校が参加し、そのなかには九州大学から参加した大学院生五名の姿もあった。

年、大会参加を視野に入れてCISGと国際商事仲裁の授業を開講し、受講者のなかから参加希望者を募ることにした。先の五名は、その呼びかけに応じてくれた学生たちである。大会の使用言語が英語であることから言葉の壁が最大の心配であったが、幸い九州大学の大学院法学研究科(現在の名称は法学府)には主に外国人留学生を対象として英語で授業を行うLLMコースがある(毎年秋から始まり、一年間で修士号を取得するコース)。そこで、われわれは一般の修士課程とLLMコースの学生の混成チームをつくることを考え、授業を両コース合併で行ったが、結果的にはLLM学生五名が参加することとなった(ただし、内一名はすでに母国で法曹資格を取得しており、参加資格がないためコーチ役に回った。外国人留学生ばかりからなるチームになったことと自体は、「これぞグローバルゼッション」ともいえ、何ら問題ではないが、九大生の圧倒的多数を占める日本人学生がこの貴重な経験をさせる機会を逃したことは残念であった。なお、教員が事案に関する具体的指導をすることは大会規程で禁止されているという事情もあり、この授業では大会に直結する準備は行わず、大会参加は課外活動として位置付けることとした。ただし、一定のレベルに達したチームを送り出すため、われわれも参加者と緊密に連絡をとりながら最大限のサポートを行ったことはいうまでもない。

参加学生たちが顔を合わせた時点で、大会の事案が公表されており、すでに出遅れていたため、学生たちは授業と併行して早速一〇月上旬から準備書面の作成にとりかかった(二月までに申立人側の準備書面、二月までに被申立人側の書面を提出しなければならぬ)。大会のホームページ( <http://www.cisg.law.nace.edu/vis.html> )では、過去の大会で賞を受けた準備書面をみることで、それらを参考としながら仕上げた準備書面は、大会の準備書面の部でも一定の評価をいただくことができた。準備書面を提出したのち、二月中旬から三月にかけては、学生たちは二組に分かれて数度の練習試合を行っている。また、二月下旬に名古屋で開催された「アジア・オセアニア国際商事仲裁シンポジウム」(主催・名城大学)に参加する機会も設け、このシンポジウムのために来日中で、実際に仲裁人として活躍されているニュージーランドのRoger Pritchard教授(マセイ大学)に仲裁人役をお願いして練習試合を行うこともできた(名古屋商工会議所が会場を提供してくれた)。この練習試合の様子はビデオに収め、後日参加者が各自のパフォーマンスを確認しあった。口頭弁論においては、議論の自身が大事なほういうまでもないが、プロフェッショナルな立居振舞いも重要だからである。

以上のような準備を経て参加した大会は、ミュンスター大学(ドイツ)の優勝で幕を閉じ、口頭弁論の部における九州大学の成績は、参加七九校中三九位であった。時間的な出遅れがあったことに加え、ドイツの強豪校では大会OBが助手として大学に残ってコーチとなったり、参加者は一学期をこの大会準備に向けたゼミに専念することもあることを考える、貧弱な体制のなかでの大健闘であったといえよう。大会期間中、学生たちは他の国からの参加者と大いに親交を深めたほか、UNCTRAL事務局を訪問したり、コンサートや美術館に出かけたりして、ウィーンの春を楽しむことも忘れなかつたようであり、今回の経験は彼らにとって得がたいものとなっている。日本人学生の参加、それに伴う英語力への対応、日本の学年暦との時期的な調整、旅費の工面(今回は学生がアルバイトをして調達した)など残された課題も多いが、今後も大会への参加を考えていきたいし、日本の他大学の参加も増えることを願いたい。

第八回大会は、二〇〇一年四月六日から一二日にかけて開催され、今年一〇月六日には大会のホームページで事案が公開される。参加者たちの静かな熱戦が再び始まるのも、間もなくのことである。

【参考】 九大チーム・ホームページ  
<<http://www.law.kyushu-u.ac.jp/~take/visteam.html>>

(その・ひろお)九州大学助教  
(ルーク・ノッテジ)ヨーロッパ大学院大学ジョン・モネ研究員・元九州大学助教